

盆器を考える

田中本家博物館の盆器コレクション② 万年青鉢 その2

Bonki :

Based on the research about Tanakahonke's flowerpot collection2.

Omoto -2

佐久間真子

(愛知県陶磁美術館 学芸員)

Masako Sakuma

概要

この「盆器を考える」と題したシリーズは、信州須坂藩の御用商人をつとめた田中本家の生活の品を保存公開する「豪商の館 田中本家博物館」所蔵の盆器コレクションの調査をきっかけとし、江戸時代後期からの園芸文化とともにあった、様々なやきものの盆器について資料紹介と考察を行っていくものである。

今回は前回に引き続き、同家が好んでコレクションした京都・短冊家製の黒楽鉢に注目する。前回、新出資料として取り上げた京都・短冊家の絵師による『錦鉢模様控』と窯元に残る作品を手がかりとして、実際の短冊家製の鉢の特徴を探り、資料紹介を行う。

1. はじめに

1-1 黒楽焼の鉢について

この「盆器を考える」と題したシリーズは、信州須坂藩の御用商人をつとめた田中本家の生活の品や収集品を保存公開する「豪商の館 田中本家博物館（以下、田中本家博物館）」（註1）所蔵の盆器コレクションの調査をきっかけとし、江戸時代後期からの園芸文化とともにあった、様々なやきものの盆器について資料紹介と考察を行っていくものである。

このコレクションの中で、先回は黒楽焼の万年青鉢を取り上げた。陶磁史としての先行研究がほぼ皆無である中、黒楽焼の鉢についてその出現と生産者を探り、新出資料として、京都・短冊家（註2）の職人による『錦鉢模様控』（図1）に注目した。この図案集に描かれている数々の鉢の特徴ある絵柄と、田中本家所蔵の鉢に多く共通する部分があったことで、田中本家（特に8代目当主の佐賀氏と推測）の好みが短冊家タイプ（註3）のものであったことが分かった。

また、この『錦鉢模様控』の存在が、明治20年代頃のこの窯元のある程度の量産体制を示しているとおおり、短冊家製（なかには流行に乗って生み出された多くの短冊家タイプのものも含まれるだろう）の鉢は当時から、園芸ブームによる増減はあるものの現在まで、高い人気を誇っている。

1-2 今回の紹介資料

さて、現在まで筆者はひきつづき短冊家タイプの黒楽鉢を多く拝見する機会に恵まれたが、はっきりとした銘等のあるものは見当たらず、いずれも短冊家製とする根拠には欠けるものであった。そもそも、現在の窯元にも、明治～昭和期に制作された上絵付のある黒楽鉢は残っていないため、じつは明確な基準資料が存在しないも等しいのである。（昭和期と推測される、上絵付のない鉢は残されている）

しかし、まことに幸いなことに、鉢ではないが、上絵付のある黒楽の香炉3点が現在も窯元に保管されている。窯元である川寄家の住まいの仏壇で実際に使用されていたもので、筆者が初見した際には、中に灰がまだ残っていた。

この3点の作品は、短冊家製の黒楽鉢において今後基準資料のひとつとなりえる大変貴重なものであると言えるため、今回、比較考察をまじえながら紹介させていただく。

短冊家和楽の皆様のご理解とご協力に、深く感謝を申し上げます。

2. 資料紹介・短冊家和楽所蔵の上絵付け香炉について

2-1 概要

それでは、現在の短冊家和楽に残されている上絵付け香炉について、1点ごとに特徴を記す。

①上絵金彩龍鳳凰文筒型香炉（図2～4）

口径：6.6cm

高さ：6.8cm

底径（高台内径）：4.5cm

丸い筒型の香炉。めだつ轆轤目は見当たらず、ヘラの調整跡が多く、全体に器壁は薄い。黒釉は、高台内や畳付も含め、全面に施される。内面は鉛が主体の透明釉が施される。釉の光沢は強い。胴部に一部漆の直しが入る。底部に目跡あり。

絵付けは全て、金彩を含む上絵付け。胴側面に二つの窓枠をとり、一方に鳳凰、もう一方に龍を描く。窓周囲は青緑と黄色の七宝文で埋める。脚部分には雷文。高台の周りに白の点を1周めぐらす。口縁は剥落が目立つが、金彩。

上絵の具の色は、白、赤、緑、青緑、4色。絵具は立体感が出るように塗られており、特に白絵具はぷっくりとした表面になっている。その他の絵具も、広い面を塗りつぶすよ

うに塗られる部分は少なく、線・点を置くように緻密に描いている。

金彩は、鳳凰・龍の部分では白絵具の上に施され、雲は直接釉の上に描かれる。雲は濃い金で輪郭をとり、薄い金で中を塗る部分もある。

②上絵金彩扇面づくし文筒型香炉（図5～7）

口径：6.6cm

高さ：6.7cm

底径（高台内径）：4.0cm

丸い筒型の香炉。①と同様の成形、施釉がされている。内面底部に亀裂が入っているが、やはり直しを入れている。底部には5つの目跡がある。

絵付けは、①と同様に金彩を含む上絵付け。扇面を6つ描き、それぞれに馬、亀甲に花、水辺に杜若、波千鳥、幔幕に宝珠、もみじを描きこむ。扇面以外の部分は、大小さまざまな種類の菊で埋め尽くされている。口縁は剥落が目立つが、金彩。脚部分には雷文。

上絵の具の色は、白、赤、緑、青緑、青の5色。いずれも、一度白もしくは色絵の具で形を描き、その縁（正確にはその絵の具の上から）金ではっきりと輪郭をとり、さらに色絵の具で中を塗りつぶしている。絵の具は点・線を置くように盛られて描かれており、立体感のある表面となっている。白絵の具の上から、さらに細かい線で青や緑、金を入れる手法を多用しているのが特徴。色の塗り重ねの手間はもちろん、その緻密な筆づかいには驚くべきものがある。

金彩は、先述のように白もしくは色絵の具の上に施されるが、菊の周囲などは釉の上にじかに塗られている部分も見られ、全体では金屏風のような華やかな雰囲気がある。

③上絵金彩龍獅子菊文脚付角型香炉（図8～10）

口径：横7.5×6.0cm

高さ：7.1cm

最大幅：8.7cm

長方形で、胴部がふくらんだ脚付きの香炉。手づくねで成形されており、器壁はかなり厚い。口縁の短辺に2つの耳付きがあるが、一方は欠損している。ヘラで脚部と底部を整えたあとが残る。目跡は4脚の畳付にそれぞれ見られる。

黒釉は内面を除き、脚の畳付も含めて全面に施されている。①②と同様に深い黒でツヤがある。内面は灰による汚れもあるのか、光沢が失われている。

絵付けは、①②と同様に金彩を含む上絵付け。龍の描き方から、①と同じ絵師の手によるものと思われる。長辺の側面にそれぞれ円形の龍と獅子を描き、短辺の側面には菊を描く。それ以外の部分は赤色の唐草文で埋め、口縁まわりと脚部まわりは雷文で囲っている。

色絵の具の色数は少なく、白、赤、わずかに緑が使われている。金彩は剥落が激しいが、

龍と獅子、菊、口縁まわりの雷文のそれぞれに施されていたと思われる。やはり絵の具は立体的な表面となっている。

2-2 上絵付の特徴と疑問

3点の作品に共通するのは、上絵付の緻密さと、その立体的な絵の具の置きかた、金彩の施しかたである。いずれも、絵具で塗りつぶしただけの部分はほとんどなく、非常に細かい線、点を用い、たいへん丁寧に絵付けされている。もっとも特徴的なのは、金彩である。モチーフの輪郭のほか、花卉や、波の筋などは、髪の毛よりも細かい線で入れられている。主に白絵の具の上から丁寧に施されているため、発色が良いこともあげられる。

後述の田中本家所蔵の鉢との比較で詳しく記述するが、これらの特徴は、上絵付のある黒楽の鉢の中でも限られたものにしか見られないのである。

さて、ここで疑問になってくるのは、これらの香炉がいつ頃制作されたのかということと、製品として制作されていたのかということである。

制作時期としては、おそらく上絵付を開始してごく初期のものではないだろうか。やきものを含む多くの工芸品の場合、技法が生まれた初期がもっとも卓越しており、後期になるにつれ粗雑になる傾向がある。香炉の本体の制作は、茶陶の窯元である短冊家にとっては難しいことではないだろう。しかし、これだけの手間のかかる上絵付けを施したものは、製品だとしても少量の注文制作だったのではないだろうか。現に、窯元でも、香炉は直しをいれながら、大切に使用されていた。

今回は、この香炉の制作背景の考察に及ぶことはできなかったが、興味深いものである。

3. 作品比較による考察

短冊家に残る3点の香炉から、同窯元の（明治期の）上絵付の特徴は挙げることはできたが、もちろん、これらの特徴が見られない鉢を「短冊家製ではない」とただちに決め付けることはできない。複数の絵付け職人がいたことは、『錦鉢模様控』の存在が示している。職人ごとに手は異なるだろうし、職人の入れ替わりもある。『錦鉢模様控』に共通する文様であっても、上絵付の手法が異なる鉢も見られる。したがって、これらの香炉を絵付した職人は、窯元のなかの一人であったという事実にとどめておく必要がある。

しかし、現在でも短冊家タイプの鉢が多く存在する中、今回の3点は、基準資料としての価値が大いにあるということも改めて強調しておきたい。

さて、本論のテーマでもある田中本家所蔵の黒楽の万年青鉢の中にも、前回述べたように『錦鉢模様控』と共通するモチーフの鉢が多い。その中から、さらに今回は、上絵付の特徴に注目してみる。

3-1 田中本家所蔵の鉢との比較

田中本家の盆器蔵に保管されている黒楽の鉢は、他の染付や焼締めの鉢と異なり、蔵の壁中央に、特別に棚を作って収められている。この鉢の大まかな配置は、鉢の収集時点から大きくは変わっていないと推測される。いわゆる錦鉢は棚の上段に置かれ、絵の無いものは下段に重ねて置かれている（図11）。

錦鉢の多くは細やかな絵付けが施されているが、絵付けのタイプは数種類ある。最も多いのは、緻密な絵付けで、青緑の絵の具を多く用いるタイプ。絵の具は平面的で、白と緑の絵の具がわずかに盛り上がる程度である。内面上部に、色見とみられる3つの丸印(註4)が付いたものはすべてこのタイプに入る。香炉に比べると、やや輪郭や文様の線は太い(図12)。そのほかには、イッチンで文様を描くいわゆる「手島風」のものや、川中島の戦いを絵画のように描いた大振りのものなどがある。

香炉と同じタイプの、線が細く、絵の具が盛り上がっているタイプは、現時点で調査が完了した中には1点を確認するのみである(図13、14)。『錦鉢模様控』の中にも類似の文様が見られる作品だが(図15)、銘などがあるわけではない。

田中本家所蔵の錦鉢の多くが、同図案集と共通する文様がみられる一方、描き方も香炉に似ているものが1点というのは、意外なことに思われる。このことから推測できるのは、田中本家に“短冊家製の鉢が少ない”ということではなく、同家には“香炉と同じ職人の手による錦鉢が少ない”ということである。制作と収集の時期のズレや、量産の際の絵付けの違いなど、さまざまな要因が考えられる。

3-2 上絵金彩菊散し文鉢との比較

今回4点目の資料として、香炉と共通する描き方の鉢を紹介する。

④上絵金彩菊散し文鉢(図16)

口径：7.8cm

高さ：8.5cm

穴：3.6cm

個人蔵の黒楽の鉢で、万年青や蘭などの奇品ファンの間では「紫金牛鉢」(註5)と呼ばれる形のものである。富貴蘭鉢の胴を長くしたような形状で、胴は中央で反らずまっすぐと伸びており、底部はなだらかな丸みを持たせて成形される。鏝も万年青鉢のように、高さと同じ幅になる「胴返し」ではない。器壁は薄く、大変軽い。穴の切り口は、多くの黒楽鉢の場合、水を含ませたなめし皮や指などでなめらかに整えるが、この作品では切りっぱなしになっている(図17)。

この鉢で注目すべきは、上絵付の絵の具の盛り上がり、香炉の菊文様とのデザインの共通性である。

菊文様は、すべて白絵具を盛り上げた上に、金彩を施したものである。花卉全体に金が塗られていたもの(図18)から、花卉の筋に細く金を入れているもの(図19)など、花

ごとにさまざまである。絵具の盛り上げの高さなどはとくに②の上絵金彩扇面づくし文筒型香炉と同じくらいである。現在では花芯の部分と輪郭以外、金はほとんどが落ちてしまっているが、制作当初はかなり華やかな印象だったと思われる。

また、②と共通する菊文様がいくつかある。図 20 は②の菊文部分だが、細い花卉が重なるものや、丸い形のもの、図 21 の本作品の中にも見られる。花の角度、花芯の部分の描き方などの特徴が共通している。また、丸い形の菊は『錦鉢模様控』の中にもみられる(図 22)。菊文様のデザインの共通以外にも、細く金の線で花卉の筋を入れている点(図 23)など、両作品には、同一あるいは同じ時期に非常に近い位置で仕事をしていた絵付け職人が関わったと推測される。

また、『錦鉢模様控』には「上筋青」という記述が見られ(図 24)、これは鏝裏の胴に 1 本または 2 本の青緑色の圈線を入れる指示と思われる(この圈線は、文字による指示が無い鉢の図にも、また他作品にも多くみられる)。これが本作品にも見られる(図 25)ことも、モチーフの共通性とともに関及しておきたい。

つまり、菊文散し文鉢の存在は、短冊家に残る香炉と同一あるいは近い位置にいた絵付け職人が関わった鉢が流通していた、ということを証明しているのである。

4. まとめにかえて：短冊家製の鉢についての問題提議

今回、短冊家に残る 3 点の上絵付け香炉と、それに類する上絵付の鉢の資料紹介をおこなった。そこから得られる情報としては、短冊家がある時期(おそらく上絵付を始めてごく初期)に、特徴ある絵付けを行っていたことであり、私用(=香炉)と流通用(=鉢)の双方にそれが施されていたことである。ただ、その特徴ある絵付けが、いったいいつ頃からいつ頃まで行われていたのかは未だ把握できておらず、また複数の職人が所属していたのならば、同時期にこのタイプの絵付けだけを行っていたと言うこともいえない。

現在、“古鉢”のなかでも非常に人気の高い“短冊家製の鉢”だが、これらは何らかの基準資料に基づいてそのように断定されている状況ではない。人気の高い鉢であれば、その周辺に多くの似たタイプの鉢が出現することは大いに考えられる。もちろん、こういった点は園芸ファンの方々にも周知のことであり、さまざまな検証が進んでいる。

今後、陶磁史研究の視点から盆器を捉える本シリーズとしては、黒楽焼の上絵付けの鉢をどのように考えてゆくかを、まとめにかえて記しておくことにする。

まずは『錦鉢模様控』と類似のデザイン(鉢の形状ではなく、絵付けの意匠)の鉢を多く所蔵する田中本家コレクションについて、購入・保管・使用記録を探し、そこに短冊家製の鉢の流通の実態を見つけたい。また、窯元である短冊家に残る資料が、さらに発見される可能性も考えられる。

いずれにしても、実証的な視点から、江戸後期～昭和頃までの豊かな園芸ブームと、それとともにあった鉢の姿が明らかになっていくよう、努めたいと思う。

本稿執筆にあたり、次の方々に格別のご協力・ご助言を賜りました。記して感謝申し上げます。（敬称略、個人名は50音順）

田中本家博物館

短冊家和楽

川寄基生

川寄貴生

田中和仁

田中宏和

西口郁夫

《註》

註1「豪商の館 田中本家博物館」は長野県須坂市穀町476にある、平成25年で開館20年をむかえた博物館。享保18（1733）年に初代当主・新八が穀物、菜種油、煙草、綿、酒造業などの商売を手掛け、以後代々須坂藩の御用商人を勤めた北信濃屈指の豪商に成長。その館を利用した博物館で、約100m四方を20の土蔵が取り囲む屋敷の作りを残している。またこの土蔵には、江戸中期から昭和までの田中家代々の生活に使用された品々が保存されている。

註2 短冊家は、文政年間（1818～1829）、八坂神社門前茶屋の主であった短冊家七左衛門が開いたとされる楽焼の窯元。1918（大正7）年に、屋号を「短冊家和楽」とした。本論では、明治期の屋号に合わせ「短冊家」と表記する。『錦鉢模様控』では「短冊屋」とされており、「家」「屋」の使い分けは明確ではない。

註3 本論では、「短冊家製」と「短冊家タイプ」を使い分ける。前者は、短冊家で制作されたことが明確な作品を指し、後者は『錦鉢模様控』などに類似の文様がある作品（明治期～現代まで制作年代を問わない）を指す。

註4 園芸ファンの間でいわゆる「五柳鉢」の証とされる印である。

註5 万年青と並び、正月の縁起物とされるヤブコウジである。江戸園芸では紫金牛（こうじ）と呼ばれる。やはり万年青などと同様、明治期に非常に高価で取引されていた。



図1 『錦画鉢模様控』表紙 明治25（1892）年 短冊家和楽蔵



図2 上絵金彩龍鳳凰文筒型香炉 明治期か 短冊家和楽蔵



図3
同別面



図4
同底部



図5 上絵金彩扇面づくし文筒型香炉 明治期か 短冊家和楽蔵



図6
同別面



図7
同底部



图 8 上絵金彩龍獅子菊文脚付角型香炉 明治期か 短冊家和楽蔵



图9
同別面



图10
同底部



图 11 田中本家博物館の盆器蔵内部



图 12 上絵金彩青海波文鉢
明治期か 田中本家博物館蔵



图 13 上絵金彩波千鳥文鉢 明治期か 田中本家博物館蔵



图 14 同部分



图 15 『錦画鉢模様控』（中面部分）
明治 25（1892）年 短冊家和楽蔵



図 16 上絵金彩菊散し文鉢
明治期か 個人蔵

図 17 同底部



図 18 同部分



図 19 同部分

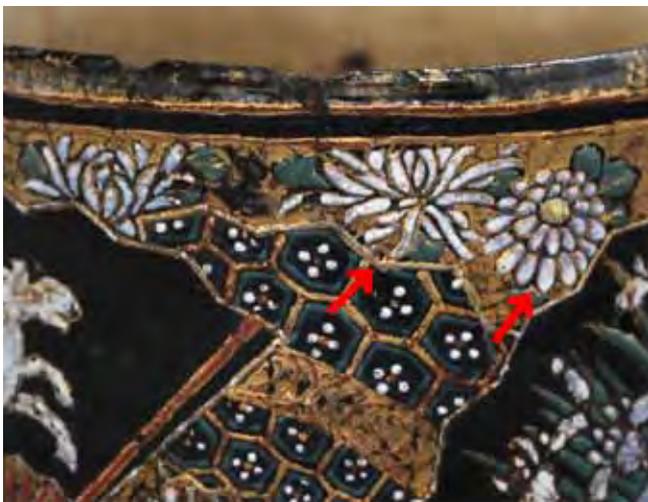


図 20 上絵金彩扇面づくし文筒型香炉 部分



図 21 上絵金彩菊散し文鉢 部分



図22 『錦画鉢模様控』（中面部分）
明治25（1892）年 短冊家和楽蔵



図23 上絵金彩扇面づくし文筒型香炉 部分



図24 『錦画鉢模様控』（中面部分）
明治25（1892）年 短冊家和楽蔵



図25 上絵金彩菊散し文鉢 部分